梁啓超にとってのルネッサンス

末岡　宏

本稿は梁啓超のルネッサンスの位置づけとを通して、梁啓超の清代の学術観を検討するものである。

私事になるが、京都大学人文科学研究所の「梁啓超の研究」班に参加し、日本を媒介とした梁啓超の西欧文化・文明の受容を研究する機会を得た。筆者は、主に梁啓超の中国哲学研究を課題としたのであるが、以前から常々感じてきた疑問があった。それは、清代の学術史を述べる際に必ずといってよいほど触れられる梁啓超の『清代学術概論』の記述はどこまで信頼できるものなのであろうかということである。もちろん、著作というものは、どのように客観的記述を心掛けても、著者の思想を反映するものであるが、『清代学術概論』はそういったレベル以上の梁啓超の意志が感じられる。それは例えば小野氏が「ヨーロッパを座標軸に清代学術を分析する、という大胆なこころみは、むしろ国学それ自体に即して、さめた眼で研究しようとした国故整理の流れのなかにあっては、やはりきわめてユニークな存在であった、といえるであろう。」[1]と指摘するようにヨーロッパに視点をおいた点、それを「座標軸」として中国の学術を評価しようとする点にあるのだろう。

梁啓超自身が自序で「わたしは十八年前、「論中国学術思想変遷之大勢」を著し、『新民叢報』に発表した。その第八章で清代の学術について論じた」「わたくしのこんにちにおける根本的な考え方は、十八年前と大きな違いはない。」（『清代学術概論』自序）と述べている。つまり、『清代学術概論』は、『新民叢報』に連載した「論中国学術思想変遷之大勢」の第八章「近世之学術」の部分を下敷きにしているわけである。これまで「論中国学術思想変遷之大勢」に注目した研究は少なかった。しかし、先程述べた、ヨーロッパを座標軸とした分析の視点は「論中国学術思想変遷之大勢」ですでに獲得されているのではないか。ただし、それが質を変えて『清代学術概論』に継承されているのではないかと考えられる。そこで、本稿は『清代学術概論』に先行する「論中国学術思想変遷之大勢」に注目し、その内容を検討することによって、一九〇〇年代の梁啓超の清代学術観を検討してその意味を考えてみようとするものである。

一　発端

「論中国学術思想変遷之大勢」[2]は『新民叢報』の一九〇二年三月の第三号から四・五・七・九・十二・十六・十八・二十一・二十二号及び一九〇四年の第三年五号（総五十三号）・六号・七・十号（総五十八号、十二月）に連載された。第三号に連載を開始した際の前言によれば、当初の構想では一　総論・二　胚胎時代（春秋以前）・三　全盛時代（春秋末・戦国）・四　儒学統一時代（両漢）・五　老学時代（魏晋）・六　仏学時代（南北朝・唐）・七

儒仏混合時代（宋元明）・八　衰落時代（近二百五十年）・九　復興時代（今日）[3]・十　学術思想界之暗潮・十一　地理上之関係　上（国内地理）・十二　地理上之関係　下（国外地理）・十三　政治上之関係・十四　文学上之関係・十五　学術思想所生之結果・十六　今後革新之急務及其方法の十六章に分けて叙述しようと構想されたものである。しかし、実際には第二十二号に「第六章　仏学時代　第四節　中国仏学之特色及其偉人」まで連載したところで一端中断し[4]、一九〇四年改めて第八章「近世之学術（起明亡以迄今日）」として明の滅亡から執筆当時までの部分が掲載されている。

まず梁啓超の時代区分の当初の構想を考える前に「論泰西学術思想変遷之大勢」執筆の動機を検討してみよう。「論中国学術思想変遷之大勢」と同時期に書かれた梁啓超の学術思想関係の著作に「論学術之勢力左右世界」[5]及び「論泰西学術思想変遷之大勢」[6]がある。これは「論学術之勢力左右世界」が序論もしくは総論となり「論中国学術思想変遷之大勢」と「論泰西学術思想変遷之大勢」が、世界の学術の世界を東西に分けた各論として記述する構成をとっているとしてよい[7]。ちなみに「論学術之勢力左右世界」は梁啓超が学術あるいは学術思想について触れたほぼ最初の著作であり『新民叢報』発刊に当たって学術の重要性について宣言したものである。その主張は、「この世の中でただ一つの大勢力はどこにあるだろうか。智恵だけである、学術だけである」「凡そ私たちが今、着ているもの食べているもの使っているもの乗っているもの聞いているもの見ているものは、総て以前の時代の人民のものを利用しており、どうして学術からもたらされないものがあろうか。」と学術が世界を左右するのだと学術の重要性を説いている。この「論学術之勢力左右世界」を『新民叢報』の創刊号に掲載することで、梁啓超は学術を中国改革の手段の一つとして宣言しているのである。その上で、西洋で近世学術で世界を左右し

た学者としてコペルニクス（天文学）・ベーコン・デカルト（哲学）・モンテスキュー（法学）・ルソー（天賦人権論）・フランクリン・ワット（電気学）・アダム＝スミス（経済学）・ブルンチュリ（国家学）・ダーウィン（進化論）の十人を挙げる。さらに「自らは新しい学説を出さなかったが」「他国の文明新思想を運んで自国に移植し、幸福を同胞にもたらした」[8]人物として、ボルテール・福沢諭吉・トルストイを挙げて、「学者は世界を左右する力を持つのであるから、ベーコン・デカルト・ダーウィンになることはできなくとも、ボルテール・福沢諭吉・トルストイとなることができないだろうか」[9]と結んでいる。この中で学術は、世界を左右すべきものであって、新しい学説を生み出さないまでも、新しい学説を紹介することを当面の課題としている。ここでは、西洋文明の移植の必要性を説いているのであって、この論理に中国文明を復興させる回路は存在しない。

では、現在中国の学術思想を研究する必然性はどこにあるのか。それについては「論中国学術思想変遷之大勢」の「総論」[10]を見てみよう。梁啓超は「私にはわが青年同胞の諸君のために一言言いたいことがある。今から二十年の間、私は外国の学術思想が輸入されないのを心配はしない、私はただ我が中国の学術思想が明らかにされないことを心配するだけだ」[11]と一見西洋の学術の移植を否定しているかのように言うが、それは過渡期において「愛国心を喚起」しなければ、「古人の奴隷性から脱して、今度は一種の外国人崇拝、中国人蔑視の奴隷性を生み出すだろう」ことを危惧しているからに過ぎない。つまりここでは「外国の思想を輸入」することと、「中国の学術思想を明らかに」することの二つが要請されているのである。このうち前者は先に挙げた「論学術之勢力左右世界」等で既に述べられているので、後者の方を強調しているわけである。最終的には「総論」の最後に「二十世紀は（欧米・中国の）両文明の結婚の時代である。」[12]とし、欧米文明を中国文明を嫁に迎えることで、「すぐれ

た子供」すなわちすぐれた文明を生み出すのが「生理学の公例として必然だ」と述べるように、（中国において）西洋文明を取り入れ中国の文明と西洋の文明を融合した新しい文明を創り出すことで、再び中国文明が「再び世界の学術思想界のリーダーシップをとる」[13]わけである。ここで、中国の学術思想は西洋の学術思想を受け入れる基盤として役割を果たすわけである。また、ここでは中国の学術思想を明らかにすることが、愛国心に直接繋がっている点に注意したい。中国の学術思想を明らかにした効用として、梁啓超は「自分が知っていることに基づいて比較したならば、努力は半分で成果は倍になる」[12]と、西洋理解が早まることもその理由として挙げてはいる。しかし「今は過渡時代・端境期であって、諸君がもし国を愛するのなら、同胞の愛国心を喚起せよ」[12]と述べるところに梁啓超の真情が表れているのではあるまいか。そこには、今日を中国が文明国に復帰のチャンスであるとともに、中国が滅亡するかもしれないという過渡時代であるとの梁啓超の危機感があらわれていると考えられる。[14]「私はしばらくの間私が見聞した一二のことがらについて、これをいろいろとり交えて書いて私が将来中国の学術を研究する土台とし、これを世間に広めて私の同志がこの学問を研究する困難な道の先駆けとする。天がもし私に数十年を貸してくれたなら、私の同胞は連帯して立ち上がるだろう。」[13]と梁啓超が言う時、そこには単なる著書の意図を述べる以上に、梁啓超の決意が込められているのである。

このように中国の学術を明らかにすることが、「論中国学術思想変遷之大勢」前言でいう「復興時代」の学者たちの課題であるならば、今日は学術を復興する時代だと想定していることになる。この学術復興を実際に行うのが梁啓超を含めた学者達であり、その具体的な実践が「論中国学術思想変遷之大勢」そのものとなる。その意味で「論中国学術思想変遷之大勢」連載当初では、中国で（過去の輝かしい）学術を復興することは今なすべき

課題であって、歴史的事実ではない。事実それは「総論」の本文中に、古代・中世は中国の学術思想が世界第一であったとした上で、[14]「ただ近世史の時代となると、比較すると恥ずかしい思いに駆られる」[13]というように、近世は中国の学術思想が衰退してしまった時代だと把えているのである。この段階では、梁啓超は上世・中世に中国の学術思想が世界第一であった、つまり春秋戦国時代つまり諸子の時代は従来考えられきた様な混乱の時代では、その学術思想はギリシャ古代の学術思想よりもすぐれた「学術全盛時代」であったとする点に主眼があったと見ることができる。[15]全盛時代から今日に至るまでは、古代の西欧の中世の暗黒時代に相当する学術衰退の時代である。[16]その限りにおいて、梁啓超は清代の学術を積極的に肯定しなければならない要素はなかったのである。

ところが一九〇四年「論中国学術思想変遷之大勢」を再開するに当たって梁啓超は前言で「本論は壬寅秋に筆をおいてから、残りの原稿は長い間続きを完成せず、満足できない状態であった。このごろむだな部分を省き、以前の仕事を整理した。この三百年の学術の変遷が最も頻繁であり、関係も最も深いので、そこで先ずこれについて論じる。第六章の未完の部分の原稿と、第七章の原稿は、本章が書き上がるのを待ってから、続けて補う。」[17]と述べて、第六章の続及び第七章をおいて、第八章の連載を再開している。また第八章は当初の構想によれば、衰落時代と復興時代であったはずだが、「もとの原稿ではもともとこの章を二つの章にして、一つを衰落時代、一つを復興時代とするつもりであったが、その境界はあまり鮮明でないので、それで今の題に改めた。」[18]と、当初の構想を変えて清代以降を一つの章にまとめたとしている。これは、単なる整理の都合というだけではなく、「復興」を歴史的事実とする構想の転換を示したものであると考えられる。そこで、まず「論中国学術思想変遷之大勢」執筆当初の構想と、第八章再開時の構想の違いとをルネッサンスに注目して検討してみよう。

二　古学復興（一九〇二年における）

さて、梁啓超が考えた学術の「復興」とはどういうものであろうか。そこでまず思い当たるのが文芸復興（ルネッサンス）である。梁啓超は、『清代学術概論』の自序[19]で「十八年前と大きな違いはない」「こんにちにおける根本的な考え方」として「論中国学術思想変遷之大勢」の以下の文を引く。「この二百余年はすべての中国の「文芸復興時代」と名づけることができるが、ただその興起は漸次的であって急激ではなかった。しかし、まったく有機体の発達そのままであって、こんにちにいたるも鬱蒼として春たけなわの感がある。わたくしは、思想界の前途に無限の希望を抱いている。」[20]つまり梁啓超が「論中国学術思想変遷之大勢」から受け継いだと考えているのは、清代の学術はルネッサンスに相当するという視点である。ところで、このルネッサンスの訳語であるが、小野氏が注意するように、「文芸復興時代は、原文では古学復興時代となっている」[21]と指摘する通り、「文芸復興」ではなく「古学復興」なのである。ただし、小野氏は先の引用に続いて「彼（梁啓超　筆者注）が、明確にヨーロッパの文芸復興との対比において清学を意識したのは、やはり五・四運動を経過し、また彼自身ヨーロッパ旅行を経験するなかにおいてであったのだろう。」と続けるが果たしてそうなのであろうか。

まず、梁啓超は「論中国学術思想変遷之大勢」において、ルネッサンスをどうとらえていたのか、そしてそれ

は清代の学術の関係をどのようなものとして意識してきたのかを考察してみよう。まず連載開始時においてルネッサンスはどう訳されていたのかだが、「近世文明初祖二大家之学説」[22]のベーコンに関する記述の中に「十五世紀古学復興」にRenaissanceと注記している。[23]つまり『新民叢報』創刊時には既にルネッサンスに「古学復興」という訳語をあてていたのである。つまり、「論中国学術思想変遷之大勢」執筆当初から「古学復興」とはルネッサンスのことであり、「古文復興」と「文芸復興」はともにルネッサンスを指すことに変わりはない。では「古学復興」の意味するものはなんであったのだろうか。ここでも「論学術之勢力左右世界」が参考になる。「論学術之勢力左右世界」では「およそ史学を少しでも習った者は、近世文明を導いた二つの原因を知らないものはない、それは十字軍の東征と、ギリシャの古学の復興である。[24]」として、「古学復興」から「思想が大いに開明的になり、しばらくの間学者はもう宗教・迷信に束縛されなくなった」ことによって、西洋の近代の学術を発達したとする。このギリシャの古学とは「アリストテレス諸賢の書」つまりギリシャの古代学術を指しており、「古学復興」とはルネッサンスの古代ギリシャ学術の「復興」のことであると把えているのである。また、もう一つの原因である「十字軍の東征」はヨーロッパ仁が他民族と親しくなり、その学芸を習い、その意識を増したのである[24]」と説明されている。そして古学復興と十字軍の東征によって、はじめて先程述べた新しい学説が生み出されるのであるから、古学復興は近世文明の前提と位置付けられている。また「近世文明初祖二大家之学説」でも「いわゆる近世史とは、ほぼ十五世紀の後半から、現在に至るものである。近世史と上世（古代）・中世の特に異なる点は一つだけではないが、学術の革新が、最も顕著である。新学術があって、はじめて新道徳・新政治・新技芸・新器物がある、これらがあって、はじめて新国、新世界がある。[25]」と、やはり学術が総ての変革のおおもとであ

るとした上で、学術界で新しい国土を開いたものとして、「初祖二大家」つまりベーコンとデカルトを挙げる。このように、梁啓超の構想では「古学復興」の後に、近代が展開するという図式があったことになる。

では「古学」が、西欧において古代ギリシャの学術であったならば、中国ではどうだろうか。中国の「古学」とは古代の諸子の学術の復興に相当する。先に述べたように、梁啓超の連載当初の構想ではこの「古学復興」が、中国において学術思想の革新、実際には西洋の学術の移植の条件となっている自らに課した課題であった。それが第八章執筆時は「古学復興」をどう位置付けたのであろうか。第八章の中から関係する部分を検討してみよう。

三　古学復興（一九〇四年における）

ここで梁啓超は、清代を永暦[26]から康熙を第一期、雍正・乾隆・嘉慶が第二期、道光・咸豐・同治を第三期、光緒を第四期と区分し、第三期と第四期をまとめて最近世として、三節に分けて論じている。この中で重要な点は二つある。まず第一節「永暦康熙間」で新しい学術を開いたのは、顧炎武・黄宗羲・顔元[27]・劉献廷の五先生であるとする。そして、ベーコンの帰納論理学にあてる。「泰西の十五世紀から後の文学復興以後、学者はまだ詭弁・空想に陥ることを免れなかった」が「ベーコンが、帰納論理学を創出して詭弁論理学の主観的な勝手な判断の弊害を一掃したことを（原動力に）推す」ことが「西洋の近世の文明進歩の原動力となった」と西洋の文明の進歩はベーコンによって開かれたとした上で、中国に言及する。「明末葉は正に中国の詭弁・空想時代であった」と

時代背景を説明し、それに「明が滅んで顧・黄・顔・劉の諸先生が実践実用の学を主張してから、その影響を受けた、閻・胡・二万・王・梅の諸君が盛んに立ち上がった」が閻若璩・胡渭・万斯大・万斯同・王源・梅文鼎はベーコンと「同じ時代」で「その学問・組織の変更がよく似ている」ので「考証の学」は「演繹法から帰納法に進んでいる」ものだとする。[28] さらにこの部分に、『清代学術概論』序で引く、「清の学者は、『実事求是』を目的とし、科学精神が旺盛であり、さらに補助として分業の組織をもちいている」[29] 以下の文が続くのである。つまりここで、梁啓超は、永暦康熙間の五先生とその学統を引き継いだ康熙雍正期の学者たちの考証学が、ベーコンの帰納論理学と類似していることを論じている。つまり、清初の考証学を生みだそうとする運動はベーコンによる近代学術の誕生への第一歩と同じく、「考証学は帰納的な科学の精神、近代的な分業組織」があって西洋と同じく近代学術を生み出す契機を持っていたわけである。しかし、梁啓超が「西洋では帰納学派によって思想が日々盛んになったが、中国では帰納学派によって思想が日々消沈した」[28] と述べるように、それは実ることのない胎動に終った。そして考証学は、そのすぐれた方法をこまごまとした考証にしかもちいなかったので「支離滅裂で性霊を埋もれさせるもの」になって思想を衰退させてしまった。そして、学術の革新は先に持ち越されてしまったのである。

次に第三節「最近世」で西漢今文学についての記述で龔自珍を「近世の思想の自由の先導者」、魏源を「国民が外国に関心を持つことを奨励した」と「新思潮の萌芽」つまり現在の中国における新思想・新学の直接の先駆者だと評価する。[30][31] その思想と今文学との関係を考察し、今文経学と龔自珍・魏源の「新思想」との関係は密接な関係にはないとしたうえで、それは西洋の古学復興と近世の学術思想の関係に相当するとする。「西洋の古学復

興、遂に近世を開いた。ギリシャの古学は、果たして近世の科学哲学と、離しがたい関係にあるのだろうか。そうではあるまい。しかし銅山が崩れたら洛陽の鐘が応じて鳴るのは、そのきっかけ（きざし）はもともとそのようなものである。社会思想が長い間一つの思想に束縛されると、その制限に挑戦して打ち破るものがいる。その人があきらかにしたことは、必ずしも真理に当たるとはかぎらないが、しかしそれを主張するには根拠があり、言うことが道理にかなっているので、人々の耳目を震わせて、一筋の光明を導く。これが懐疑派が学界の革命と関係がある理由である。[32]」と、西洋の古学復興はそれまでだれもが信じていたことに対して疑問を投げかけた懐疑派であって、そこから「懐疑派の後、詭弁派が後を継ぎ、詭弁派の後に学界革命が成立した」と、懐疑派は従来の桎梏を打ち破る上で学界革命にいたる導火線の役割を果たすのだと、古典復興を直接には懐疑派にあてる。ここで今文学派は「学術の革命」の「機」をもたらした、「一種の懐疑派である」として、中国の学界革命を導く先駆けなのである。ここではじめて、考証学が成しえなかった学界の革命をもたらす運動が起きることになる。

では、清代の学問はどのようなものであったのだろうか。第三節「最近世」で清代の学問を総括して「総じて清一代の学術は、たいてい「（古人のことを）述べてはいるが（自分の著作を）作ることなく、学んではいるが考えることがない」、だからこれを思想が最も衰えた時代といってもよい。しかしながら、易の卦の（衰退を示す）「剥」と（回復を示す）「復」とが寄り添うように、変化の気運は、明らかに次第に進行していたのである。[33]二百六十年間を通じて観察すると、不可思議のおもむきがあり、人の力でどうにかできることではない。」と思想的には衰退の過程にありながら、その過程の中に復興の流れが伏流していた認識している。第八章の前言で「（衰退時代と復興時代の）その境界はあまり鮮明でない」と述べたのはこのことを言っているのであろう。そして清

代を学術の流れは、四つの時代それぞれが、明学から宋学、宋学からへ漢学、東漢学から西漢学、さらに先秦の諸子学へと、それまでの歴史の流れを遡って古代の全盛期にもどっていったのだとする。これが『清代学術概論』序に引く「清代二百余年の学術は、じつは、これ以前の学術を逆に展開させたものである。あたかも春の筍を剥ぐがごとく、剥げば剥ぐほど内にせまる。あたかも甘藷をくらうがごとく、くらえばくらうほど美味である。奇異なる現象といわねばならぬ。この現象は、だれがうみだしたのか？社会環境の種々なる因縁が生み出したのである。」[34]ということの具体的な過程である。では、そのどこが「不可思議」であり「奇異」なのか。もちろん、それは古代の全盛時代の学術思想（古学）の復興という最終的な到達点は一緒であるにせよ、本来の歴史の進化の過程を逆戻りしている点にある。これを第一期に見られたとする近代学術の芽が結局実を結ばず、考証学といういささか奇妙な形で展開したことにその原因が求められるのであろう。

ここでは梁啓超の果たすべき役割が変化していることに注意したい。つまり「論中国学術思想変遷之大勢」連載当初は、梁啓超自らの課題は「古学復興」であった。しかし第八章再開時には古学復興は「今文派」が既に実現していたとすることで、梁啓超の任務は変化してきている。では、梁啓超が果たすべき役割とはどういうものだろうか。それは「論中国学術思想変遷之大勢」の末の文に

戊戌・庚子の政変以降、日本の東京には、盛んに新思想の要路に引っ越そうとして、海を越えて遊学するものが、月に百人もあり、学生は学校にみちみちて、翻訳書はフナのようにたくさんあり、その言論は老大家たちを驚かせ、その気勢は政府をおびえさせる。今後、思想の革命は、流れはおしとどめようがない。いまは芽を出したばかりで、雑然として識別のしようもなく、一つのまとまった考えを形成しておらず、私たち

は今後輩に種を播く義務をつくすことができるだけだが、この芽を育て収穫するのは、それなりの人がいるであろう。国を滅びさせさえしなければ、新政府が成立後二十年で、きっと大きく光を放ち全世界に大きな名声をはせる学者も出るだろう。私はわが国の古代の聖人を見ることで、信じることができるのである。

ここでいう梁啓超の「種を播く」作業は実際には外国に行って外国の学術思想を学び翻訳することであり、そのモデルとして厳復を挙げている。つまりここで梁啓超は自らの役割を、西洋の学術思想を中国に取り入れることであるとするのである。この西洋の学術思想を取り入れることは、「論中国学術思想変遷之大勢」連載開始時にも、古学復興即ち中国の学術を明らかにすることと並んで、当面なすべき課題の一つであった。そして第一節で挙げた「論学術之勢力左右世界」や「総論」末で、西洋の近世の学術をもたらした遠因として挙げられた「十字軍の東征」の「外国に行って、彼の地の学芸を習い、知識を増大させる」という定義がそのまま当てはまる。つまり、梁啓超の果たす役割の重点は、「古学復興」から「西洋の学術思想の輸入」へと移ったわけである。

四　結論

さて、梁啓超にとって、古学復興とはいかなるものであったか。それは中国において新しい学術を生み出す前提であった。それは、まず梁啓超の考える学術の進化観・歴史観が背景にある。まず、西洋の学術の進化の過程を、古代のギリシャの学術思想が最盛期を迎え、中世のキリスト教が支配した暗黒時代を経て、ルネッサンスと

外国の文明との出会いによって、近代の学術が生まれたのだと分析する。そして中国も同じ過程を繰り返すはずであるから、中国が古学復興と外国の学術思想の導入することによって、必然的に世界をリードする新しい学術思想を生むという軌跡を描くはずだとする。この全体の構図そのものは連載当初の時点から一貫して変化はない。しかし、中国の歴史的事実とは西洋の歴史の過程のどの段階にあるかについての位置付けが、第一章で考察した「論中国学術思想変遷之大勢」連載当初と、「論中国学術思想変遷之大勢」第八章を執筆した時点では異なっている。それは端的に、梁啓超が生きていた時代、梁啓超の言葉でいう「今日」の位置付けにあらわれる。前者では今日が中世の最後で近代に移行する初期の段階にあるとするのに対して、後者では今日は近代への第一段階である古学復興は今文派にシフトすることによって、近代へ更に一歩踏み入れた段階にあるとする。そこから、梁啓超がなすべき当面の課題も、前者の古学復興から後者の西洋文化の移植とそれに続く学界革命へとシフトしているのである。そして、後者の位置づけは若干の変化はあるものの基本的には『清代学術概論』へと引き継がれていると言ってよい。小野氏が「明確にヨーロッパの文芸復興との対比において清学を意識し」ていないと感じたのは、「論中国学術思想変遷之大勢」の記述の中で、清代学術のどの時期をルネッサンスに位置付けるかが変わったからだったのであり、『清代学術概論』は後者の方を引き継いでいるわけである。

ではこの変化はどうして生じたのであろうか。それは、直接には梁啓超の歴史の過程への理解が深まったということであろう。まず西洋の学術の進化の過程について、連載当初では、外国文明との接触と古学復興が、直接近世の学術の誕生に結びついていたのに対して、第八章執筆時には古学復興は直接近代の学術を生み出したのではなく、懐疑主義から詭弁派を経て帰納主義に至ることで近代学術が生み出される学界革命が起きたのだとする。

それに対応するように、清代の学術も、単なる衰退の過程ととらえるのではなく、清初に一端帰納主義に相当する傾向が生れたがそれは西洋とは違った方向に進み、今文学の誕生から今日に向かって進化するというように、いわば考証学・今文学の二つを別の運動ととらえるようになる。そこには、西洋の学術進化への理解がより詳細かつ具体的になり、中国の歴史上の時期との対応関係もより明確になっている。その変化の原因は、もちろん梁啓超が日本で学んで知識が増えたためだけだとは言い難い質的な相違がある。やはりそれをもたらした契機があったと考えられるのである。

それには「論中国学術思想変遷之大勢」が、一年余りのブランクを経て再開されたということがヒントになる。そこで注目を引くのが、第二節「乾嘉之学」の割注にある「以上（乾嘉まで）の伝授の派別を叙べるのに、少しく章炳麟の訄書からとってこれを増補して、かつその下に私の意見を書いている」[36]とある句である。この清朝の学者の「伝授の派別」を述べているというのは、『訄書』で該当する篇は「清儒」[37]のことである。「論中国学術思想変遷之大勢」第二節「乾嘉之学」と『訄書』「清儒」の記述を比較してみると、挙げてある学派・人物がほぼ一致するだけでなく、その学派の説明・評価の部分についても、本文中に章炳麟の言葉として引く戴震に関する地理的要因を説く部分以外にも『訄書』「清儒」と同じ言葉を用いている部分がある。つまり梁啓超が言うように乾嘉以降の考証学についての記述は『訄書』「清儒」の記述を踏襲している。両者で大きく異なるのは、章炳麟が近世の孫詒讓と彼自身の師である兪樾を挙げて戴・段・二王の学の後継者と評価し、逆に漢宋兼採の陳澧は全く評価していないのに対して、梁啓超は全く逆の評価をする。それは章炳麟が自分自身を考証学の継承者と位置付け、康有為を否定したためである。[38]ところで、この「清儒」は初刻本にはなく、一九〇四年六月に出版され

た重訂本ではじめて見られる篇である。『訄書』重訂本は、「駁康有為論革命書」を発表して康有為ら変法派と決別した章炳麟が革命派としての自らの見解を明らかにした書であり、しかも「清儒」は「論中国学術思想変遷之大勢」と同じく高田淳が言うように「清朝学術論を中国学術史全体の中で論じようとする」[39]ものであって、変法派の学術観に真っ向から対立するものであった。そのため章炳麟の提起した学術観に対して反論するために、梁啓超も新たな学術観を提起する必要があったのである。ここで、梁啓超は、表向きには清代の学術の学派・系統（伝授）については章炳麟に依りながら、肝腎の学術観・歴史観の部分で章炳麟に反論しているわけである。これが梁啓超が突然「論中国学術思想変遷之大勢」を清代の部分から再開した理由の一つであろう。

では、梁啓超はどうしてでルネッサンスを今文学に位置させるという発想を得たのか。それは、井上哲次郎の影響があるのではなかろうか。井上哲次郎の「日本古学派之哲学」は井上を代表する儒教研究三部作の二番目に位置するものである。その「結論」で「古学は文学復興（即ちルネッサンス）の結果として起れる研究にて畢竟直に蹤を孔子に接せんとする向上的進修に外ならず、蓋し文学復興によりて、我邦の学者が一時に後世の学問の妄謬を看破せるに本づく、〈中略〉是れ我邦思想発展の順序に於ては確かに一歩を進めたるものなり、此の如き復古の学を総称して古学といふと雖も或る意味にては寧ろ新規の学なり、」[40]（括弧ママ）と言っている。ここで井上は伊藤仁斎・荻生徂徠をはじめとする日本の古学派を評価して、孔子へ直接復帰することによって朱子学に対しての反動の性格を持つ儒教の革新運動であり、それはルネッサンスにあたるものだと述べている。これは、梁啓超が今文派がやはり孔子にもどろうとする性格を持った儒教の革新運動であるのにそっくりではないか。何より、東洋の哲学と西洋の哲学の融合による新らしい哲学を創り出すというのは井上の一貫した主張である。第八

章執筆のほぼ同時期に、『子墨子学説』の附言[41]に井上の言葉を引いて参意を示しているから、その影響を受けたとしても不思議ではない。「論中国学術思想変遷之大勢」のベーコンの帰納論理学の説明で用いた唯一「古学復興」以外の訳語である「文学復興」が、井上のルネッサンスの訳語と一致することも、梁啓超が井上の「日本古学派之哲学」を見たことを示す傍証と言えるだろう。

そして、日本が古学派というルネッサンス運動を経験した日本が、「慶応から明治のわずか数年間の間に西欧の新学が全国を風靡するようになった」[42]と述べる時、日露戦争で大国ロシアと戦っていた日本は東西文明を融合した新たな文明を創りだす条件を持っていると梁啓超の目には写っていたのではないか。

さて、以上考察してきたように、「論中国学術思想変遷之大勢」の基本的な視角は『清代学術概論』に引き継がれている。その視角の裏には、西洋の歴史の進化の図式に、中国の現状をあてはめようとする梁啓超の姿勢が見え隠れする。これは佐藤慎一氏が言う「真理は固有の価値を持ち、孔子の言説と一致するか否かにかかわりなく、真理それ自体として最優先で受け入れなくてはならない」[43]ことを自覚した梁啓超が、逆に真理と考える歴史の進化の公式に捕われてしまい、それに一致するか否かで判断してしまっていることになる。特にこの傾向は「論中国学術思想変遷之大勢」で濃厚であって、辛亥革命後政治から一定程度離れた立場から書かれた『清代学術概論』には比較的希薄である。それが小野氏の言葉で言う「ヨーロッパを座標軸に清代学術を分析する」ことになるわけだが、後の『中国近三百年学術史』[44]となると西欧の思想との類似性の指摘はほとんどなくなり、記述は正確であってもかえって面白みをなくしている。つまり『清代学術概論』の、清代の学術をルネッサンスに当てて評価する方法は、最も幸福な成功と言えるだろう。そこには、外形的な類似のみをとりあげるだけではなく、ル

ネッサンスの根本精神である、古学の復興の名を借りた革新運動という本質が、清代の学術の担い手の意識、あるいは漢学復興という傾向の本質と合致すればこそ成功を治めたのだと言えるのだろう。

注

(1) 小野和子訳『清代学術概論』(東洋文庫五四二　一九七四年平凡社)三五八頁「あとがき」
『清代学術概論』は、一九二〇年十一月十五日から『改造』第三巻第三―五号に『前清一代思想界之蛻變』という題で連載された。『飲冰室専集』第三十四冊に所収されている。また本稿では小野和子訳の訳注及び朱維錚校注『梁啓超論清学史二種』(一九八五年復旦大学出版社)に収められる『清代学術概論』を随時参照した。

(2) 「論中国学術思想変遷之大勢」は、『飲冰室文集』第七冊に収められている。本稿では主に『飲冰室文集』所収のテキストを用いて、『新民叢報』を参照して補った。『飲冰室文集』・『飲冰室専集』は、一九八九年中華書局刊の『飲冰室合集』を用い、注で示したページも『飲冰室合集』のものである。
なお、『新民叢報』の発行年月日は実際の発行日時とずれることがあるが、森時彦氏の『東方協会会報』の「受贈目録」による調査によれば、この時期の『新民叢報』発行年月日はほぼ正確である。

(3) 『飲冰室文集』所収のものには、章名が掲載されていない。
各章がどの時代に当たるのかは「一胚胎時代、春秋以前是也。二全盛時代、春秋末及戦国是也。三儒学統一時代、両漢是也。四老学時代、魏晋是也。五仏学時代、南北朝唐是也。六儒仏混合時代、宋元明是也。七衰落時代、近二百五十年是

也。八復興時代、今日是也。」（三頁）という「総論」の本文（『飲冰室文集』第七冊三頁）によって補った。

（4）　第十章以降は、結局構想のみで書かれなかったようである。地理・政治・文学との関係等は当時の梁啓超の展開した主要な課題である。

（5）　『新民叢報』第一号　『飲冰室文集』第六冊

（6）　『新民叢報』第六号　『飲冰室文集』第一二冊に「論希臘古代学術」の名前で収める。

（7）　『新民叢報』第六号の「論泰西学術思想変遷之大勢」の前言には「（「論中国学術思想変遷之大勢」）第三章・第四節は『戦国学術とギリシャ学術の比較』と題する。読者がギリシャ哲学の学説について、はっきりしないのをおそれて、先ずこの篇を著し参考に付した。」とあるから、必ずしも「論中国学術思想変遷之大勢」連載開始時に西洋の部分を書く予定があったとは限らない。しかし、前言は続けて「また本論はもと緒論一章があるのだが、またこの理由によって、後回しにする」とあることから、この時点では中国の部分を完成させた後、西洋の学術についても執筆する予定はあったと考えてよかろう。

（8）　『飲冰室文集』第六冊一一五頁

（9）　同前　一一六頁

（10）　『新民叢報』第三号　『飲冰室文集』第七冊一～四頁

（11）　『飲冰室文集』第七冊三頁

（12）　同前　四頁

（13）　同前　二頁

（14）　過渡時代についての梁啓超の考えは「過渡時代論」（『清議報』第八三冊一九〇一年　『飲冰室文集』第六冊二七頁）に詳しい。

（15）　中世に関しては「中世史時代、我国之学術思想、雖稍衰、然欧州更甚。欧州所得者、惟基督教及羅馬法耳、自余則暗

無天日、欧州以外更不必論。」と、中世は中国の学術思想は上世よりも衰えたが、欧州は更に衰えた暗黒時代であったために、中国が世界第一なのだとのことわりがつく。

(16) 「(訓詁学)遠導近今段玉裁王引之之嚆矢、買櫝還珠、去聖愈遠。…至是益非孔学之旧、而斯道亦稍陵夷衰微矣。」(「儒教統一時代」『新民叢報』第一二号 『飲冰室文集』第七冊五一頁)とあるのは、「論中国学術思想変遷之大勢」の前半部連載時には考証学を肯定的に評価していなかったことを示すと思われ、連載中断の時点までこの見解が続いていたと見てよいであろう。

(17) 一九〇二年を指す

(18) 『新民叢報』第三年第五号

(19) 『飲冰室専集』第三四冊三頁 小野書 x

(20) 『新民叢報』第三年第一〇号 『飲冰室文集』第七冊一〇三頁

(21) 前掲 xiv

(22) 『新民叢報』第二・三号 『飲冰室文集』第十三冊所収

(23) 後述するように、この部分の記述は第八章に継承されている。

倍根、英国人、生於一千五百六十一年、卒於一千六百二十六年、其時正承十五世紀古学復興 Renaissance 及新教 Protestant 確立之後学界風潮漸変。雖然、学者猶泥於希臘亜里士多徳・柏拉図之科臼(「近世文明初祖二大家之学説」『飲冰室文集』第一三冊二頁)

泰西自十五世紀文学復興以後、学者猶不免渉詭弁、陥於空想、自倍根興而始一矯之(「論中国学術思想変遷之大勢」『飲冰室文集』第七冊八六頁)

(24) 『飲冰室文集』第七冊一一一頁

(25) 『飲冰室文集』第一三冊一頁
(26) 永暦は明の永明王の年号、清ではほぼ順治年間に相当する。
(27) 「論中国学術思想変遷之大勢」（『飲冰室文集』第七冊八六頁）なお、ここではルネッサンスに「古学復興」ではなく「文学復興」の語を用いているが、前述「近世文明初祖二大家之学説」で「十五世紀古学復興」というのを見ても、ルネッサンスを指す。なぜ「文学復興」の訳語を用いたかは後述。
(28) 『飲冰室文集』第七冊八六頁
(29) 『飲冰室文集』第七冊八七頁
(30) 『飲冰室文集』第七冊九七頁
(31) 魏源の「海国図志」は日本では佐久間象山・吉田松陰・西郷隆盛らに影響を与え、実際に明治維新とう改革をもたらしたと評価する。
(32) 『飲冰室文集』第七冊九七頁
(33) 同前　第七冊九八頁
(34) 同前　第七冊一〇〇頁
(35) 『新民叢報』第三年第八号　『飲冰室文集』第七冊九三頁
(36) 同前　第七冊九三頁
(37) 『訄書』　重訂本（『章太炎全集』第三冊一五四頁―一六二頁）第十二篇「清儒」のち『検論』巻四に同文を収める。『訄書』『検論』については、『章太炎全集』第三冊（一九八四年上海人民出版社）を用いた。訄書の「初刻本」「重訂本」の名称及び出版時期についての推定は、同書の朱維錚の「前言」に基づいた。
(38) 『検論』（『章太炎全集』第三冊四七七頁）では実際に戊戌変法の際康有為を支持した翁同龢・潘祖蔭の名を挙げて陳澧を非難している。

(39) 高田淳『章炳麟・章子釗・魯迅―辛亥の死と生と―』（一九七四年龍渓書社）第一章「戊戌・庚子の章炳麟の思想」一一三頁

(40) 井上哲次郎「日本古学派之哲学」（明治三十五（一九〇二）年九月　冨山房）

(41) 『子墨子学説』第五章「墨学之実行及其学説之影響」（第三）「明鬼与実行之関係」附言　『新民叢報』第三年第九号（総五七号）一九〇四年　『飲冰室専集』第三七冊四七頁

この部分は、井上哲次郎の『武士道叢書』と梁啓超の『中国之武士道』の関係を示すものであるが、詳細は別稿に譲りたい。

また、井上哲次郎と梁啓超の関係については、来日当初の一八九九年五月の「哲学会」例会で既に面識があったことが、「梁啓超の研究」班でバスチド氏から報告されている。また、井上哲次郎の『哲学辞彙』も梁啓超は見ていたはずである。

(42) 『飲冰室文集』第七冊一〇四頁

(43) 「文明と万国公法」　祖川武夫編『国際政治思想と対外意識』（一九七七年　創文社）　のち『近代中国の知識人と文明』（一九九六年　東京大学出版会）所収（一三〇頁）

(44) 『中国近三百年学術史』　『飲冰室専集』第七五冊

一九二三年から一九二五年の間、清華大学・南開大学で行われた講義をもとにしている

最後に、この論文を執筆するに当たっては、「梁啓超の研究」班における班員の諸氏の研究発表及びその後の討論に直接的・間接的に教えられることが多かった。ここに感謝の意を表する。特に研究班にお招きいただき、日本の中国哲学研究に関する指摘をいただいた狭間直樹氏、『新民叢報』の発行時期に関して詳しい調査された森時彦氏、「論中国学術思想変遷之大勢」における進化の公理公例について言及された井波陵一氏、井上哲次郎の「古学派」とルネッサンスと

の関係を指摘頂いた中村哲夫氏の研究の成果は本論中で直接利用した。研究報告より先に本論を発表することになったために、直接引用しなかったことを寛恕いただきたい。